

ヴィア・ラティーナ・カタコンベ墓室Ⅰ壁画 —いわゆる「医学の授業」について

宮 坂 朋

- (1) カタコンベの概要と問題点
- (2) 墓室Ⅰの概要
- (3) 研究史
- (4) 図像解釈
- (5) 結論

(1) 概要と問題点

1955年にローマのディーノ・コンパーニ街で偶然発見されたこの地下墓地(図1)は、キリスト教考古学上、今世紀最大の発見の一つとして、多くの研究者の関心を引き付けてきた。全体の規模は小さく、使用された墓室の数はAからOまでわずか13を数えるに過ぎないが、各々「負の建築」により念入りの内装が施される。しばしば「絵画館」とも呼ばれる事実が示す通り、ほぼ全壁面がフレスコ技法の壁画で装飾されている。これらのフレスコ画の図像は、通常の教区墓地を飾る壁画とは異なるものを多く含む。絵画装飾、特殊な図像、「負の建築」、小規模といった、これらの特徴は全てキリスト教共同体所有の墓地では稀なもので、このカタコンベが私有の墓地であったことを物語っている。

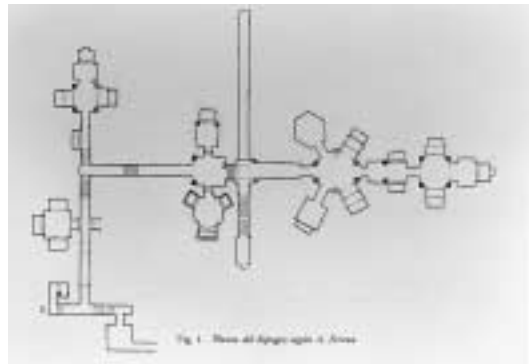


図1 ヴィア・ラティーナ・カタコンベ、プラン
(フェルレアによる)

カタコンベ自体の成立時期については、いくつかの仮説が提出される。これまで大半の研究者は、漆喰の重なりなどの考古学的観察を参考にしながらも、主に壁画の様式や図像から年代決定してきた。フェルレアは、315/20-350年という早い時期を想定し¹⁾、ドリーゴやダイヒマン²⁾は、4世紀後半から5世紀という遅い年代決定をする。トロンゾは315-370年に、4段階にわたってこのカタコ

ンベが作られたと考える³⁾。一方、スペイン隊は正確な地図(図2)と立面図をはじめて制作し、墓室のタイプから新しいクロノロジーを提案した⁴⁾：

第1段階：A, A', 3, B(B'は実験的なタイプの正方形プランのクビクルムであり、Cとの継ぎ目がない。中央にメダイヨンのある天井と円柱を持つ。アルコソリウムは一重である。Cとは全く異なるデリケートなストゥッコによる建築装飾である。BとCでは絵画の図像も技法も異なるとする。)

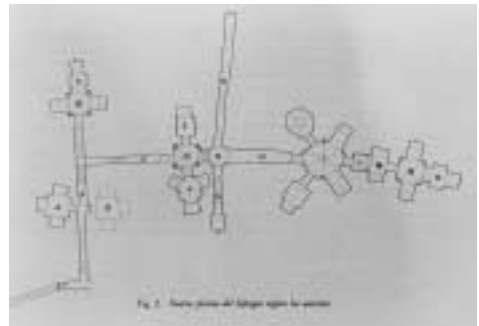


図2 ヴィア・ラティーナ・カタコンベ、プラン
(スペイン隊による)

第2段階：4, D, E, F, G(GとEは、矩型で円柱で装飾された、同じタイプと考える。これはトロンゾとは異なる意見である。)

第3段階：5, Gの変形, H, I, L

第4段階：M, N, Oが掘られ、全体の拡張が最終段階に到達する。

第5段階：B'が変形され、Bとなり、N-Oを真似てCと連結される。

特にこれまでの通説であったCとOの関係をくつがえすという点でこの編年は新しい。

5世紀には、カタコンベの壁は白い漆喰のまま残されるのが特徴であり、このように密に装飾された地下墓室が作られたと考えることは難しい。また図像や様式から、4世紀前半に掘り始められ、後半のうちに完成したと考えるべきだろう。

壁画の主題の選択は多岐に渡り、通例のキリスト教主題のみならず、ユダヤ教(旧約聖書)主題のみの墓室Bの他、異教的神話主題のみで装飾された墓室E(テュルス)およびN(ヘラクレス)、「異教」と「キリスト教」主題の混在する墓室OとIが存在するなど、墓地の所有者の宗教が、このカタコンベ研究の最大の問題となっているといえる。今までのところ、

- (1) 宗教的に無差別に売却された
- (2) 折衷派
- (3) 異教ユダヤ教主題のキリスト教的解釈

という3つの考え方が提示されている。キリスト教以外の主題が共同体のカタコンベにまぎれこんでいる例(ヴィピアなど)も稀ではあるが存在し、このような現象は私有墓地の場合は一層容易であったことは想像に難くない。しかしながら、このように異なる宗教の主題が、狭い一つのカタコンベの中に(あるいは一つの墓室の中に)共存することがいかにして可能であったのだろうか。この問題を考える端緒として、墓室Iの「医学の授業」と呼ばれる壁画について考察するのが、本論の目的である。

(2) 墓室Ⅰの概要

墓室Ⅰは、六角形プランで、各々の角に円柱が掘り残される。多角形プランの集中式建築は、キリスト教以前の霊廟建築にも採用されていた。その伝統に則り、六角形のクビクルムも、稀ではあるが、ローマの4つのカタコンベにおいて作られている。中でもドミティッラのカタコンベの6つのクビクルムはいずれも大規模な4世紀の作品で全てに絵画装飾がある⁵⁾。

そもそも古代人にとって、数は無機的なものではなく、6という数字もまた創造と結び付いたものとして解釈されていた。ピュタゴラスにとっての聖数は10であったが、6もまた、マクロコスモスを意味

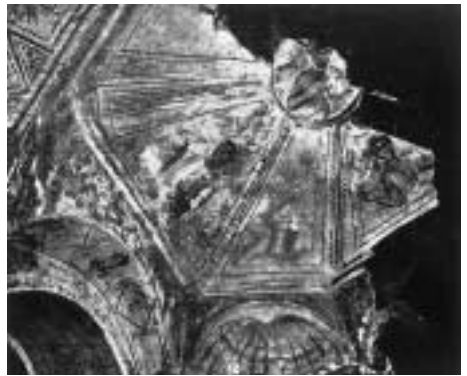


図3 墓室Ⅰ天井画、「書物を持つ哲学者とカプサ」



図4-7 墓室Ⅰ壁画、「巻物を持つ哲学者立像」

し、2つの三角形を合わせた6つの角のある星形は、精神と物質の統合として創世の日を象徴するものであるとされる。キリスト教時代にも、オリゲネスの『ヨハネによる福音書註解』28巻には、「数の性質の研究をしている人々は、第一の完全な数は6であると言っています。」とある。このように、死後の再生を願って掘られた墓室のプランとして6が選ばれたのは偶然なことではないといえる⁶⁾。

天井は、発見当初のボーリング工事によって破壊されており、上に建てられたアパートの支柱によって視界が遮られている。墓室全体がフレスコ装飾されており、哲学主題を統一テーマとしている点が興味を引く。すなわち天井には哲学者の胸像と書物(図3)、腰羽目にはトゥニカとパリウムをまとい、巻物を手にする典型的な哲学者の立像が4人(図4-7)、2つのアルコソリウムのう

ちのeには、玉座のキリストと二使徒(図8)、そしてhのルネッタには、いわゆる「医学の授業」(図9)と呼ばれてきた、コの字かU字形になったベンチ、エクセドラに座す一群の人物像が描かれる。この「医学の授業」の画面中央には口髭と顎髭を豊かに蓄えた人物が、下着を着けずにパリュムのみを肩にかけ、上半身はほとんど露出させて座る。これは典型的な犬儒派の哲学者の出で立ちであるといえる⁷⁾。彼は他の登場人物よりスケールが大きく、中央に位置し、さらに衣装の違いのせいで、大きく際立っている。両脇に3人ずつ彼の弟子とおぼしき白いトゥニカとパリュムの人物群がひしめくようにすわる。向かって右の人物は全て髭を生やしている。一方、左側では髭がない。2人は若い容姿で、そのうち一人はもみあげを伸ばし、左端の人物のみ禿げている。ここには、容貌を多様化しようとする



図8 墓室I、アルコソリウムeルネッタ壁画、「ペトロとパウロの間のキリスト」



図9 墓室I、アルコソリウムhルネッタ壁画、「いわゆる医学の授業」

意図が明らかに見てとれる。彼等のサンダル履きの足元にはブーメラン形の影が描き込まれる。最も手前に並ぶ人物は全員で7人であるが、彼等の頭越しにも多くの頭部が覗いている。しかし、モノクロミーで描かれた群衆の頭部のみからは、これらの多くの人物の空間に占める位置がはっきりとは示されない。彼等は座っているのか、あるいは立っているのだろうか?いずれにせよ、この群衆表現は、ヘレニズム以来のいわゆる「七賢人」の図像を半ば無理やり増幅させたものであるようである。斑点のついた毛皮が敷かれるエクセドラ形のベンチという小道具もそのままに、異教時代

からの図像の伝統に忠実な哲学者のサークルあるいは教授風景がここに繰り広げられている。しかしながら、重大な逸脱が一つ認められる。すなわち、場面前方に横たわる、小ぶりの男性裸体像である。この人物は少年であるがゆえに小さなスケールで描かれるのだろうか。座っているグループにおいても、中心の重要な人物は大きく描かれ、位階に応じたスケールが採用されていると考えられる。従って、ここでは、より重要でない人物が、小さな少年のような姿で描かれていると考えたほうがいだろう。彼の皮膚はやや紫がかっており、腹部にはチョコレート色のかなり大きな穴があき、そこから血が流れ出したような筋が描かれる。弟子の一人は細長い棒でこの死体の穴のやや上(胃のあたりか)を指し、ここに登場する全ての人物としきりに議論を戦わせているようにみえ

る。死体は、人々の足元に物のように投げ出されており、なんらの尊敬の念は表現されていない。また人々の表情は冷静で明るく、視線は死体ではなく、棒を持つ人物に向かう。身振りから議論に熱中していることは伺われるものの、死を悼む雰囲気は全く認められないといえるだろう。

考古学者だけでなく、医学史学者まで巻き込んでこれまで様々な解釈のされてきたこの場面は、キリスト教と何の関わりもないように見える。むしろ肉体と魂の死をめぐる、哲学的な談義が主題となっているようである。また「七賢人」の図像をここでの主題に合わせて変更を加えたものであることは確かであろう。中心人物を際立たせた求心構図化と登場人物の増加は、この図像がキリスト教化した時、次第に強く現われる傾向であったことはすでに指摘されている通りである。既存の図像を利用し、些かの変更を加えることにより、新たな主題を創造するやり方は、このカタコンベの別の墓室でもすでに試みられている。すなわち、墓室Cのあたかも「ラザロの復活」にみえる情景である。この「医学の授業」と通称されてきたフレスコはいったいどこに出典を見い出せるのだろうか。以下に図像解釈の研究史の概要をしるすことにする。

(3) 研究史

今まで提出された仮説は大きく次の3種類に分類できる。すなわち、

- (a) 医学の授業風景
- (b) 蘇生の場面
- (c) 哲学の議論

である⁸⁾。

(a) 「医学の授業」説について

初めて「医学の授業」説を唱えたのは、フェルレーアであり、著名な医者墓に彼の実生活の一場面を描写したものであると考える⁹⁾。クラウドザーもまた、医学の授業であると考え、特にこの場面をヒポクラテスとその弟子を描いたものと考えている¹⁰⁾。医学史研究者のコーナーもまた、優れた医者診察場面と解釈する¹¹⁾。同様にプロスカウアーは、「教授を目的とする解剖学的な解体」の場面とする¹²⁾。医者が埋葬されており、従ってここには魚屋や靴屋の墓と同様、故人の職業が再現されていると考えたとすると、葬祭美術の中では職業ジャンルに属する主題となる。名医としての故人を称える図がここに表現されていると考えるわけである。しかしながら職業としての医者が葬祭美術の主題とされたことはすでにあり、そこでは医者は哲学者の姿はとるが、もう一つの重要な特徴として、メスなどの医療用の道具が必ず登場する¹³⁾。したがって、道具が一切描き込まれていないこの壁画では医学主題が表現されていると考える根拠は希薄である。

(b) 蘇生(創造)の場面

ヘンペルはこの場面を聖書の記述に従った最初の人間の創造場面であるとし、周囲の多人数の登

場人物を天使としている¹⁴⁾。カルコピーノは神話主題の可能性を示唆し¹⁵⁾、マルーは胃のあたりの裂け目に注目し、蘇生の場面とする¹⁶⁾。ゲーデナウは、2通りの仮説を提出するが、一つは死んだユダと「マエスタス・ドミニ」の合成図像とするもので、もう一つは死者の蘇生と考える、というものである¹⁷⁾。一方、医学史学者であるアルテルトは、エゼキエルの幻であると解釈する。フィンクはラザロの復活説をとり、テキストのヨハネ11章のみを手がかりに発想された、図像の伝統から自由な創造であるとする¹⁸⁾。しかしながら、いずれも図像学の立場から納得できる説であるとは考えにくい。

(c) 哲学の議論

哲学議論説の先峰を切ったのはポイヤンセ¹⁹⁾とデ＝プロイン²⁰⁾である。ピエール・ポイヤンセは、アリストテレスとその弟子をこの画像の主題であると考へた。すなわち、弟子の一人であるソリスのクレアルコスが師アリストテレスの足元の少年の体から靈魂を解放し、また再び体に戻して、靈魂の不滅を立証する場面である、とするものである。新プラトン主義のプロティノス、ポルフィリオス(プロティノスの弟子であり、263年から6年間ローマに滞在、さらに師の死後にローマに戻り、学派の指揮を継承した人物で、時代的にヴィア・ラティーナの成立時期に近いといえる。) マリウス・ヴィクトリーヌス(改宗は334年以前であり、ポルフィリオスの作品イサゴゲーなどやアリストテレスの著作をラテン語訳した人物。ポルフィリオスはキリスト教の復活の教義に真っ向から反対していたのにもかかわらず、ヴィクトリーヌスは改宗後もポルフィリオスを否定せず、結果として異教とキリスト教の橋渡しをした。)を典拠とする考へる。また、解剖学や外科の授業であるなら、あるいは人間の創造と考へるなら、非常に長く細い指し棒を持っているのは師自身ではないのはなぜか、という疑問を提示して、これらの説に反論を加えている²¹⁾。ポイヤンセは、さらに、ピカールに従い、ナポリ(図10)とヴィツラ・アルバーニ(図11)にある2つの「七賢人」のモザイクと



図10 「七賢人図モザイク」、ナポリ国立博物館



図11 「七賢人図モザイク」、ヴィツラ・アルバーニ、ローマ

比較している²²⁾。加えて、アパメアのモザイク（図12）およびケンブリッジのコルプス・クリスティ・カレッジのインタリオと比較し、このフレスコが哲学的論議に関するものであるという彼の仮説に十分な論拠を与えた。ポイヤンセが出典であると考えるのは、アリストテレスの弟子の一人であるソリスのクレアルコス



図12 「ソクラテス・モザイク」、アパメア、シリア

『眠りについて』の断片であり、これは原典が失われ、プロクルスによる、プラトンの『国家』注釈の中に引用されている。プロクルスは5世紀の人だが、彼はこのテキストの典拠として、ポルフュリオスを引用していることは確かであるとされる。以下にポイヤンセに従い、テキストを掲げる。

：靈魂が肉体を出入りできることは、クレアルコスの著作の中に出てくる、ある人によって証明された。この人は、眠っている若者の体の上に靈魂の導き手である棒を使って、靈魂を移したのである。ソリスのクレアルコスが彼の著書『眠りについて』の中で語っているように、その人は、靈魂が肉体を離れ、またそこに入り、また避難所として利用することを神聖なアリストテレスに説得した。実際、棒で子供を打つことで、彼は少年からその靈魂を引き離し、そして肉体から遠くに靈魂を導いたのである。不動の肉体が目撃され、安全に保護され、彼は感覚のないままであった。それから、肉体から離れて運ばれていた靈魂は、棒によって連れ戻された時、すべてのことを語った。従って、この出来事を目撃者と特にアリストテレスは、靈魂が肉体を離れることができることを納得したのである²³⁾。

このテキストに記された全ての事項がヴィア・ラティーナの壁画と合致するとポイヤンセは考えるのである。これは、棒を持っているのが最も重要に見える人物と一致しないという事実をよく説明する説であると言える。フェルーアは横たわる人物は生きているように見えることを主張しており、従って子供は目覚めている状態にあるとポイヤンセは考えるのである。つまりここでは抜き出された靈魂は棒によって再び呼び戻されている。靈魂は肉体から離れうるし、それは不滅であることを見る者に納得させることになる、というのがポイヤンセの主張である²⁴⁾。

不思議なのは、フェルーアも指摘するとおり、全ての登場人物が横たわる人物の方を向いていないことである²⁵⁾。ポイヤンセによると、これは解剖学や外科の授業にはおかしいということになる²⁶⁾。

しかしながら、腹部の大きな傷（あるいは痣だろうか？）の意味がこの説によっては説明されない。この傷は無視できるとは思えない程かなり目立ち、解釈の鍵となる重要なもののように見える。横たわる人物の胃から下はほぼ全体が大きな長い穴となって口を開いているのである。この傷は暗

褐色で塗られているが、中心ほど色が濃く、周囲は薄くなっている。またこの穴の上部からいく筋かの血が垂れてきているように見える。この人物は、両腕をびったりと脇につけ、左脚を右脚にやや交差させるようにして揃え、硬直した不動の姿勢で地面に横たわる。哲学者たちの足がサンダルで強調されて描写されるのに比べると、彼のくるぶしから先の部分は、あたかも切断されたかのようである。しかし、これは保存状態の悪さによるものかもしれない。

一方、ルシアン・デ＝プロインは、ポイヤンセの哲学説を受け継ぐが、アリストテレス説でなく、ソクラテス説をとる。まず哲学テーマで統一された墓室Ⅰの図像プログラムを指摘し、2つのアルコソリウムに描かれたキリストと哲学者の対比に注目した。また医術道具が描かれないうことから²⁷⁾、医学の授業説を否定している。さらに、クレアルコスの話では、傷が説明できないことに注目し、ポイヤンセの説に修正を加える。また、この人物の目が閉じているのか、開いているのか、現状では確かめられないが、古代において眠る人物は通例目を開いたままで表現されることを指摘する²⁸⁾。裸の人物が地面に横たわっている場合、創造、蘇生の場面であることが多い。この프레스コにおいても横たわる人物は眠っているのではなく、死体と考えるべきであるとするデ＝プロインの説は正しいだろう²⁹⁾。また、クレアルコスのテキストでは、魂を抜かれる人物は少年として記述されるが、この壁画では大人として表現されているとデ＝プロインは考える。なぜならば4世紀のキリスト教美術において、アダムとエヴァ、ラザロとその姉妹、中風病み、生まれながらの盲人、洗礼のキリストなど、小さなスケールで表現された人物は、必ずしも子供ではないからである³⁰⁾。また胃の上の黒い部分は肝臓であって、古代人にとっては、靈魂の宿る場所であったとする。従ってここでは哲学主題である点は評価しながらも、アリストテレス説は脆弱であるという結論に達し、靈魂の不滅についてのソクラテスと弟子の議論が画像化されていると考えるのである。

天井では、中央メダイオンに髭のない哲学者の半身像が描かれる。パリュムのみを身にまとい、巻物を手にする。その周囲の6つの三角パネルには、やはり書物を手にする哲学者の半身像と巻物の詰まったカブサが交互に置かれるが、医学関係の道具類は一切描かれないう。しかし、医者墓だとすると、すでに述べたように、オスティア近辺のポルトゥスで発見された医者の石棺浮き彫りにあるような、医術用の道具類がヴィア・ラティーナの壁画に欠けていることが問題となる。実際、この石棺において、故人の医者は短い髭を蓄え、トゥニカとパリュムを身にまとい、椅子に座って開いた巻物に没頭する哲学者の姿で描かれている。彼の職業を判定するものは、戸棚の上に陳列された、これらの道具類だけなのである。この墓室Ⅰの立壁面に描かれた4人のトゥニカとパリュムの立像についても、同様に持ち物は巻物のみであるといえる。従って、この墓室Ⅰの注文主は、医者ではなく、教養人であるとデ＝プロインは結論づける³¹⁾。

また、この墓室には"une double apotheose"、つまり、2つのアルコソリウムに2人の賢人、つまり2人の神格化された哲学者が登場することに注目した。左にはペトロとパウロの間の「真の哲学者」キリストがいるが、それに釣り合う人物というのは、やはり哲学者でなければならない、とデ＝プロインは主張するのである³²⁾。ヴィア・ラティーナの壁画とほぼ同時代に作られたアパメア

のモザイクとの比較がここでなされる。実際この作品は、中央の人物が強調されている事実と、「犬儒派」タイプであることの両方が、ヴィア・ラティーナと共通する。確かにキリスト教がこの「七賢人」図像をキリストと6人の使徒の集合図像に応用したのは事実である。これに従いサンティ・ピエトロ・エ・マルチェリーノ・カタコンベの天井画（Wilpert,no.96）やマイウスのアルコソリウム（Wilpert,no.170）にあるようなキリストと使徒の初期図像が成立した³³）。

1938年に、ベルギー博物館によってアパメアで発掘されたモザイクはソクラテスと弟子たちを主題とする³⁴）。東バシリカと呼ばれる、6世紀のキリスト教聖堂東アプシスに隣接する建物の床モザイクの人物を含むモザイクについては、この「七賢人」の他に2つ発見されている。それらは、「テラペニデス・モザイク」と「カロス・モザイク」であり、いずれも異教主題である。「ソクラテス・モザイク」には、エクセドラに座す7人の髭を生やした哲学者たちが描かれる。中央の男性の頭部のみ CWKPA-THC と銘がつけられ、ソクラテスであることが強調される。パリウムは彼の左肩にかけられ、右肩は露出している。このモザイクの下方は残念ながら大きく破壊されているが、7人の人物が占めるのは全体の2/3程度であり、残りが空白のまま残されていたとは考えにくい。そこにあったのはおそらく球体であろう。モザイク・パネルの周囲を囲む装飾帯モチーフの比較から、このモザイクは4世紀の第3四半期に年代決定される³⁵）。皇帝ユリアヌスがアパメアに滞在した362-363年にこのモザイクが制作された可能性が示唆され、また、異教徒の中心的存在であったリバニオス（314-395）の存命中の作品であることは確かであるとされる。

ソクラテスを中心とする「七賢人」の図像が表現された作品は他に知られていない。文献上、7人のメンバーについては、プラトンの『プロタゴラス』（343A）に、ミレトスのタレス、ミュティレネのピタゴラス、プリエネのピアス、アテナイのソロン、リンドスのクレオプテロス、ケナイのミュソン、スパルタのキロンがあげられるが、以前からこの7人は知られていた。メンバーの名前は様々に変化するが、7という数はヘレニズムからローマまで不変であった。ナポリとヴィッラ・アルバーニの2つのモザイクでは、ヘレニズム以来の伝統に従い、7人の哲学者は様々な自然なポーズをとり、個性が表現され、風景描写や建築を伴う空間に自由に配されている。しかしながらハンフマンが指摘するように、アパメアの「ソクラテス・モザイク」はローマ時代の2つの「七賢人」モザイクとは大きく異なる。「七賢人」図像はここで転換を迎え、それまでの自由な人物配置から、エクセドラ形のベンチに全員座り、硬直した左右対称構図へと変化することをデ・プロインは指摘する。ローマのモザイクと異なる、密集した幾何学的人物配置は、偶然の産物ではない。この変化は3世紀に始まり、特にテトラルキアの時代に著しく認められる現象だが、擬人像に取り巻かれた皇帝座像の表現に起こる変化であることがすでに詳細にわたって研究されている³⁶）。このような表現は3世紀のローマのカタコンベのキリストと使徒の座像にも認められるものである。ハンフマンは異教の画像とキリスト教画像のこれほどまでの類似について説明していないが、このアパメアの「ソクラテス・モザイク」は、3世紀の絵画をコピーして制作されたものであるとする。ソクラテスの肖像としてよく知られているのは、リュシッポスやシラニオン作のソクラテス像であるが、そ

の肖像とはおよそ似ていない。定型は確立していなかったのであろうか。両側の他の哲学者たちについては、2つの可能性が考えられる：(1) 古い七賢人のどれかのメンバー；(2) ソクラテスの有名な弟子たち³⁷⁾である。すでに述べたように、ソクラテスが七賢人に含まれる例は他にない。しかし、プラトニコス、つまりプラトン主義者と署名された人物の4世紀の家の床モザイクには、8つのメダイオンがカリオペの胸像の周囲に配置されるが、そのメダイオンはソクラテスと七賢人の胸像を含むのである。このようにソクラテスは7人の一人としてではなく、彼等に付け加えられたのであるが、ポルフェリオスの哲学者列伝の中では、ソクラテスは本来9人いた賢人の一人とされる。同様にリバニオスの *De Socratis silentio*,9 において、ソクラテスは8番目の賢人であり、7人の中には、ヘラクリトゥス、ピュタゴラスも含まれる³⁸⁾。タレスをソクラテスと取り替えたのである³⁹⁾。ハンフマン自身はソクラテスと彼の6人の弟子がアパメア・モザイクに表現されていると考える⁴⁰⁾。

プラトンの『饗宴』にはソクラテスを含めて7人の弁論者が登場するものの、画像上の作例は残っていない。リバニオスの *De Socratis silentio*,23 では、ソクラテスの弟子たちは老人として表現される⁴¹⁾。またディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』(2巻5章47)によると、ソクラテスの弟子たちとして、プラトン、クセノポン、アンティステネスが取り上げられ、さらに「十人衆」の中でも特に、アイスキネス、パイドン、エウクレイデス、アリスティッポスが選ばれて、合計7人の名前が挙げられる。ここでハンフマンは画像上の伝統から、プラトンを右翼の真ん中の人物とし、犬儒のアンティステネスをきちんと手入れされていない髭の2人のうちのどちらかとし、アリスティッポスをソクラテスの左にいる優雅な人物とするが、それほど根拠があるとは思えない⁴²⁾。

ここまでで、ハンフマンは、なぜ「七賢人」にソクラテスが加えられ、その中心とさえなっているのかも、その周囲の6人が誰なのかも、答えをだしているわけではない。ここでは、ガイザーも彼の説を支持しているように⁴³⁾、「七賢人」の一人としてのソクラテス説をとるよりは、ソクラテスと弟子たちの対話の場面と考える方が自然であるように思える。確かに新プラトン主義者にとって、ソクラテスは非常に重要な哲学者であったことは確かであろう。ザンカーは、アパメアのソクラテス・モザイクについて、中央のソクラテスのみが銘文と大きなスケールで際立たされていることに注目し、他の6人は古代の賢人であって、ソクラテスが教壇から教えを垂れるのを拝聴する図と考える⁴⁴⁾。ザンカーが考えるように「無知の知」をモットーとしたこの哲学者自ら、このようなことをするのは矛盾していると言える。実際ここには人間臭い哲学者たちによる「会話」の自由な精神はすでに欠落している。古代末期には哲学者の立場はむしろ神的存在へと近づいたのであった。

このようにキリスト教時代以前にソクラテスは次第に重要性を増して行き、最も賢い、聖なる哲学者として取り上げられるようにさえなっていたことが画像から推察される。さらにキリスト教の立場から、その最高の哲学者ソクラテスを乗り越える者として真の哲学者キリストが立ち現われるのである。

カタコンベのキリストと6人の使徒は、アパメア・モザイクをモデルとしているかのようであり、

「七賢人」の図像が、真の哲学としてのキリスト教のプロパガンダのために採用された時、ソクラテスとキリストが予型論的に関係づけられるようになったことの証であるように見える。

ユスティノスの『第一弁明』5,3-4において、ソクラテスは真のロゴスと関わったものとして位置付けされている。

「しかし、ソクラテスが真のロゴスと調査とを根拠にこれらのことを明るみに出し、人々を悪霊共の手から救出しようとした時、悪霊の方でも、悪を喜ぶ人々に働きかけ、彼を無神論者、冒涇者として殺したのです。その理由は、彼が新しい鬼神を持ち込んだから、と言うのです。悪霊は、私共の場合にも同じことを働きかけているのです。このことは、ロゴスにより、ソクラテスを通じてギリシア人の前で論証されただけではありません。夷人の間でも、人の形を取り、人間となり、イエス・キリストと呼ばれた、ロゴス自身によって論証されたのです。...」⁴⁵⁾

このように、いわばキリストの予型としてのソクラテスがユスティノスによって定義される。『第二弁明』10,8においても、ソクラテスとキリスト教徒の類似について述べられ、さらにキリストがソクラテスを優越することが強調される。すなわち、キリストに殉教するものはいても、ソクラテスに殉教するものはいない、という理由からである。

「ソクラテスを信じて、この人の教えのために死に至ったほどの者はありません。これに比すれば、ソクラテスも部分的には知っていたキリスト.....の場合、愛知者や学者ばかりか、手職人や全く教養のない人々までもこのかたを信じ、荣誉も恐怖も死も取るにたらずとしたのです。....」⁴⁶⁾

さらに『第一弁明』46において、「ですからロゴスに与って生活した人々は、たとえ無神論と見なされた場合でも、キリスト教徒なのです。たとえば、ギリシア人の中ではソクラテス、ヘラクレイトスおよび同傾向の人々。」⁴⁷⁾

また、アレクサンドリアのクレメンスとオリゲネス、テルトゥリアヌスら他の教父たちも、ソクラテスとキリストの比較を熱心に行っている。ユスティノスやアレクサンドリアのクレメンスなどの護教家たちにとって、ソクラテスは、モーセ同様キリストの先駆者であったのである。一方、異教徒の側からもキリストとソクラテスの比較は行われ、マルクス・アウレリウスはソクラテスの方が優っているとし、キリストはプラトンを研究した、とケルソスは述べる⁴⁸⁾。このようにこの2人が対置させて考えられるのは突飛なことではなかった。

ヴィア・ラティーナのフレスコに登場する哲学者グループは何の話題について議論を戦わせているのだろうか。デ＝プロインよれば、彼等は肝臓を指しつつ、議論に熱中する。古代人にとって、肝臓は生命、愛情、そして靈魂そのものの本拠地であり、靈魂の部分の住みかとして、プラトンの

『ティマイオス』に出てくるものである⁴⁹）。また、『オデュッセイア』（11書575-577）において、ティテュオスが幽冥界で驚に突つかれるのは肝臓である。従って、ソクラテスを中心とする彼等は靈魂と死についてのなんらかの問題について話し合っていることが推測されるのである。つまりヴィア・ラティーナでは、「ソクラテス的永生」がキリスト教の予型として表現されているとデ＝プロインは考えるのである。

一方、ガイザー⁵⁰）は、ヴィア・ラティーナにおいて哲学者が指している人体は、通例「七賢人」たちが差し示す球体の代わりとして置かれている事実を指摘した。ポイヤンセ説（アリストテレスとクレアルコスによる靈魂不滅説の証明）により、棒の存在の説明がつく。しかし、腹部のしみの理由が明らかでないままである。そこでガイザーは、また別の哲学的会話であると考えたのである。プラトンと弟子ヘラクレイデス・ポンティコスの対話で、「気絶した女性」および「病気」という二重のタイトルがつけられる作品を出典とする。つまり、エンペドクレスが死んだと思われたアグリジェントのパンテアという女性を生き返らせた顛末が語られる断片（Fr.76-89）とこの壁画を関連づけている。つまりこのフレスコでは多くの医者にとりまかれたエンペドクレスが描かれていると考える。横たわる人物には髭がなく、少年か女性である。目が開いているか、閉じているのかは不明とする。（ガイザーは明らかにデ＝プロインの論文を読んでいない。）しみについては、断片Fr.79から体温のなごり、死斑、腐敗の始まり、などという可能性を提示する。中央の堂々たる人物を神的な知恵を持つエンペドクレスと解釈する。しかし、エンペドクレスの哲学的な対話を追想するのではなく、キリスト教的思想内容をここに伝える。これは些か説得力に欠ける論であると言わねばならない。もしこれらが医者たちだとすると、ローマ美術の伝統から言って医療器具がないのはやはりおかしいのではないだろうか。棒の説明にいたっては曖昧と言わざるを得ない。また、4世紀の美術では、死体をミイラのように体をあま布に巻いた姿で表現されるのが普通である。もし、血の筋のように見えるものが、包帯の跡でないとするれば、この横たわる人物は死体ではない可能性の方が大きい。

このようなことから、墓室Iでキリストと異教の哲学者が対置されている理由は2つ考えられる。すなわち、1)キリスト教の立場では、ソクラテスは不死のシンボルとして理解されたことから、ソクラテス＝キリストと考える。2)靈魂と肉体の関係についての、キリスト教（復活の思想）と異教（靈魂不滅説）の異なる考え方がここで、対置されていると考える。すなわち死後の生についてさまざまな考え方があることを示すことによって、墓室Iは、いわばパンテオンとなっていると考えるわけである。

（4）圖像解釈

これが、創造の場面であるにせよ、蘇生の場面であるにせよ、あるいは、死後の生や靈魂の不滅に関する議論の場面であるにせよ、これらに関する異教とキリスト教の考え方は実際は大きく異な

ることにここで改めて注意すべきであろう。つまり、キリスト教が異教と最も大きく異なるのは、肉体の復活という考え方である。キリスト教において靈魂と肉体の二元論は否定される。復活とは魂だけの復活ではなく、肉体も含んだ人間全体の復活として捉えられるのである。

古代における靈魂の輪廻転生は、オウィディウスの『変身物語』(XV,70)やプラトンの『パイドン』(70C)の記述「靈魂は、この世からあの世へ行ってそこに存在し、そしてふたたびこの世に帰ってきて、死んだ人々から生まれかわる」に明らかにされる。この考え方は、靈魂の不滅と応報説が前提となるものである。通常ギリシアにおいて、人間の靈魂は理性部分と非理性部分に分けて考えられるが、輪廻転生の際、靈魂の全体が意味されているのか、動物へ転生する場合、理性部分はどのようなものか、が哲学上の問題とされた⁵¹⁾。

アウグスティヌスは『神の国』(X.30; XII.26; XIII.19)において、ポルフェリオスへの批判を行っている。その根拠は輪廻転生批判と動物の転生批判をした点では評価できるが、不滅の肉体の復活を否定し、肉体なしの永遠の生を提案したという理由である。キリスト教の復活の教義は、ギリシアの輪廻転生と決定的に対立するのである。プラトンは肉体を牢獄と考えたのだが、キリスト教は肉体の復活を唱え、異教徒たちに見捨てられていた肉体を復権させている。

異教徒達のうち、特にプラトン主義者は、死後の靈魂は肉体を離れ、生前の生き方に応じた星へと上昇帰還すると考えていた。これはプラトンの『ティマイオス』(31B ~ 32B)に遡及しうる考えである。彼等は地上的肉体は、その重さから、天にあがることはできないということを根拠として、肉体の復活に反対しており、この点でキリスト教と真っ向から対立している。

ヴィア・ラティーナ墓室Iで、キリストと2使徒と、この哲学場面が対置され、かつ、天井にも壁面にも哲学者達が描かれているのは、むしろキリスト教徒でない側から、キリスト教を見た場合の視点が反映されているのではないかと、思われる。つまり、厳然として異なる死生観への理解なしに、ソクラテスあるいはアリストテレスをキリストと同等の者として並べ、肉体の軽視(みじめに地面に打ち捨てられた卑小なものとして表現することから伺える。キリスト教のラザロの復活の場合は、復活する死体は神殿型の墓廟の中に収められているのであるのと対照的である。)と靈魂の不滅、天上世界での永世(天井に描かれた上半身だけの巻物をもつ哲学者)がそこに描かれるのである。あるいはキリスト教徒であっても、肉体の復活という根本的な教えに対して、ある程度無頓着な、ギリシア哲学の異教的な側面に対する志向の強い人々がこの壁画のパトロンであった可能性が高いと考えることもできるかもしれない。

(5) 結論

バチカンのネクロポリス、サン・セバスティアアーノのカタコンベ、あるいはヴィピアのカタコンベなどの例が示すように、異教とキリスト教の墓が混在する例は特殊な例としていくつか存在する。社会の構造を考えてみても、厳然とした区分け、住みわけはされていなかった部分も少なくないようである。また、教皇レオー一世の説教に出てくるように、聖堂の入り口で太陽に向かって祈り

を捧げる信徒の存在も記録に残される。

「... すなわちある素朴な人々は、高い所に登って日の出を拝んでいる。キリスト信者の中にすら、こうした行為が特別な信心だと思っている人がいる。かれらは、生きたもう唯一のまことの神にささげられた使徒聖ペトロの大聖堂にはいる前に、階段を登りつめていちばん高い所に来ると日の出の方へ向きなおり、この輝かしい天体をあがめるために頭をたれ、礼拝する。このことは、一つには無知から、また一つには異教的な精神からくることであるが、わたしはこのことを非常に嘆き、苦しんでいる。」⁵²⁾

異教起源の様々は習俗は、日常生活のあらゆる場面で見かけるものであった。なかでも最も保守的に異教的な習慣が温存されたのは、葬儀に関するものではないだろうか。そもそも死者を埋葬する、土葬の習慣も当時の流行であったわけである。それがキリスト教の死者の復活の教義に合致したため、火葬が廃れることになった。また埋葬する際に、浮き彫り装飾で充たした石棺を用いたり、墓室内部を壁画で装飾することも、キリスト教以前からあった習慣であったといえる。本来キリスト教は、聖書の定める通り、偶像否定であったが、3世紀以降になると、異教美術を受け継ぎ、さらに発展させていったのであった。実際にその装飾モチーフは、神話主題を起源とするものも多く借用している。たとえばプシュコポンプスとしてのメルクリウスが、キリスト教徒の墓に描かれたり、あるいは、キリスト教徒の墓に描かれた死後の世界の描写が、ウェルギリウスの記述する異教的な神話世界そのままであったりする。

このようなキリスト教の教えの理解の不徹底の他にも、別の理由があるだろう。ニュッサのグレゴリオスなどの例が示す通り、キリスト教徒にとって、異教の学問は唾棄すべきものであったわけではない。エジプトの学問を身につけたモーセに倣って、教父たちは文化受容の方針を採用したのであった⁵³⁾。ユスティノスは、異教の神々に対してははっきりと攻撃的態度をとりながらも、ソクラテスを「キリスト者」として規定し、またキリストを「フィロソフォス」と、キリスト教を「フィロソフィア」と考える。ユスティノスは当時の哲学諸学派を遍歴し、その中で特にプラトンの教説を信奉した後、キリスト教に入信したとされるが、すでに指摘されるように、これは彼にとって全く異質なものへの回心とは考えられておらず、引き続き「愛知者(フィロソフォス)」と自称するのである⁵⁴⁾。このようにユスティノスはキリスト教とギリシア哲学を断絶・対立においてでなく、連続性においてとらえようとするのだが、このような姿勢は教父にとってむしろ特殊なものではなかった。

なぜキリスト教が哲学と看做されることが可能であったのか。本来、議論というものは悉く哲学上の問題としてなされ、従ってキリスト教もまた、一つの「哲学」として解釈されたことが最大の理由であろう。さらに、ザンカーが述べるように、3世紀に哲学者の在り方自体が大きく変化し、彼等は奇跡を起こす超自然的な存在となっていった背景も見逃せない⁵⁵⁾。実際、クレメンス、オリ

ゲネスはこのような精神的背景の中に成長していった哲学者であった。ストア派はホメロスとヘシオドスを真理の規範的表現と考え、プラトンの見解に反対し、神話に比喩的意味を求め、それを体系化した。アレクサンドリア学派も同様なやり方で旧約聖書を取り扱ったのである。オリゲネスは聖書に、字義的、歴史的、霊的解釈を施すが、プラトン主義者やピュタゴラス学派の著作を讀破し、一貫して哲学的方法をとっている。そしてプラトンの『法律』篇における「神は宇宙の教師である」という表現に従って、オリゲネスは、キリストを、偉大な教師と看做すのである⁵⁶⁾。オリゲネスを高く評価したカッパドキアの教父たち、バシレイオス、ニュッサのグレゴリオス、ナジアンソスのグレゴリオスもオリゲネスにならい、あらゆるギリシア哲学の著作を讀む。しかし、聖書を「法」としてではなく、教育とみる。キリスト教徒は、聖書の教説を、そのパイディアとしてして受容しなければならず、絶対的権威としての聖書をパイディアの観点から解釈しようとするのである⁵⁷⁾。

ここで明らかになるのは、幅広い異教、世俗、その他の図像の流入を可能にした時代の枠組みであり、さらにはおなじみの哲学者の図像の喚起したものとその意味の転換である。ザンカーは、ほとんどマルーによって予め準備された論旨に従い、死者を弔う葬礼美術ジャンルにおける哲学者図像の変遷とキリスト教化、およびキリスト教化した図像における転換について述べる。さらにキリスト教化された哲学者図像のモデルとして、はじめにコンスタンティヌスのバシリカがあり、それが全てのカタコンベ壁画と石棺浮き彫りのプロトタイプとなった、という仮説を提示する。すでに異教時代に教養崇拜は過熱しており、本当に教養ある階級だけでなく、下層にも浸透していた、とザンカー自身述べる。

確かに教養ある上層階級へ、キリスト教が浸透していくときに、教養人の図像を採用することが必要であった。「真の哲学」としてのキリスト教のメタファーは、少なくとも4世紀のはじめにはキリスト教社会に完全に受け入れられていた。キリスト教の「ヘレニズム化」の例証である。キリスト教神学の言葉使いや思考パターンだけでなく、画像からもキリストが偉大な教師であるという信仰を証明する必要があったのである。

ザンカーが考えるように教養信仰はステレオタイプ化した、葬式の花輪のようなものであったことは確かだろう。しかし実際は一段階複雑であるように思われる。下層民の葬られたカタコンベや石棺の崩れた図像が先にあり、さらにそこに葬られた聖人の墓を飾る画像をバシリカが受け継ぎ、図像の伝播に重要な役を担ったと考えた方が正しいのではないだろうか。キリスト教図像が発生し、発展していったのは、葬祭図像の範疇であり、それはキリスト教徒にとって、最も重要だったのが、死後のよりよい生を獲得する、という一点だったからである。さらに聖人の崇敬儀礼に従って画像が伝播していったことが強調されるべきだろう。「律法授与」の図像の起源やカタコンベ壁画そのままのサンタクイリーノ聖堂のモザイクについて考えてみた時、それは明らかになる。さらに付け加えるならば、地上のバシリカにこの図像が採用された時、「無教養なキリスト教」と見下す異教徒に対する反論のイメージとして、共同体の内側だけでなく、外側にも向けられ、強調されたものであること忘れてはならない。

エルスナーは、ヴィア・ラティーナの墓室C（旧約主題の壁画がある）と墓室N（ヘラクレス主題の壁画がある）は非常に似ていることを指摘している⁵⁸）。つまり、予型論的な画像プログラムがここに展開していると考えるのである。予型論的な画像は異教的ローマですでによく知られており、たとえばコンスタンティヌス帝の凱旋門において、トラヤヌス、ハドリアヌス、マルクス・アウレリウスの浮き彫りが予型論的に組み合わせられて一緒に利用されている。さらに異教の受けたキリスト教からの影響について語っているが、その可能性は無視できないように思われる。あるいは建築において、ユダヤ教のシナゴグがキリスト教聖堂の成立に先んじたのはわずかにすぎないことが指摘されている⁵⁹）。画像に限らず、予型論的な考え方は、異教においても、またユダヤ教においても古代末期に広く受け入れられていたのであった⁶⁰）。

古代末期にあって、諸宗教が相互的に与えあった影響は無視できない。さらにキリスト教が公認され、強化しつつあった4世紀後半という時代において、キリスト教側から、異教あるいはユダヤ教に与えた影響というものも大いに考えられるのではないだろうか。

キリスト教は、その教義によってだけでなく、社会によっても制約を受けていたことを十分考慮していく必要がある。帝政期の社会によって、キリスト教自体変貌を余儀なくされたが、同時に当時の人々を引き付けたその魅力によって、他の諸宗教にも大きな影響を与えることになったのである。教義、典礼、聖堂建築、美術の全てにおいて、その事実は指摘できるのではないか。

実際は異教とキリスト教の関係あるいは、決定的な違いについて、実は今だ明確にはされていない⁶¹）。なぜなら、今だ「異教」（実際、異教という宗教は存在しない。）自体の研究は進んでいないからである。特に古代末期における異教祭儀の実態については、教父文献の中に散見する、キリスト教の勝利により失われたテキストの断片の研究のみが細々と行われているにすぎない。今や新しい視点、切り口からの研究が必要な時期にさしかかっているのではないだろうか。つまり単にキリスト教のバックグラウンドとしての異教の研究ではなく、キリスト教以外の様々な宗教のありかたについて、特に考古学から実証的な研究を始めることが求められているのであろう。

1999年10月および2000年3月に、修復直後のカタコンベを見学する機会に恵まれた。新たな知見を得ることができたことを Pontificia Commissione di Archeologia Sacra の Fabrizio Bisconti 氏に感謝する。この成果については、P C A S 未発表の事実も多いため、別の機会に公表したい。

参考文献（単行本）

- 1994 Idoia Camiruaga, Miguel Angel de la Iglesia, Elena Sainz.
La Arquitectura del hipogeo de Via Latina.
- 1991 Ferrua, Antonio.
The Unknown Catacomb : A Unique Discovery of Early Christian Art.
(introduction by Bruno Nardini ; translated by Ian Inglis)
- 1991 Bargebuhr, Frederick Perez.
The Paintings of the "New" Catacomb of The Via Latina and The Struggle of Christianity Against Paganism. (edited by Joachim Utz)
- 1990 Ferrua, Antonio.
Catacombe Sconosciute : una pinacoteca del IV secolo sotto la Via Latina.
- 1986 Tronzo, William.
The Via Latina Catacomb : Imitation and Discontinuity in Fourth-Century Roman Painting.
- 1978 Fink, Josef.
Bildfroemigkeit und Bekenntnis : das Alte Testament, Herakles und die Herrlichkeit Christi an der Via Latina in Rom.
- 1976 Koezsche-Breitenbruch, Lieselotte.
Die neue Katakomba an der Via Latina in Rom : Untersuchungen zur Ikonographie der alttestamentlichen Wandmalereien.
- 1960 Ferrua, Antonio.
Le pitture della nuova catacomba di Via Latina.

註

- 1) Antonio Ferrua, *Le pitture della nuova catacomba di Via Latina*, 1960.
- 2) W.Dorigo, *Pittura tardoromana*, 1966, p.221ff. F.W.Deichmann, "Zur Frage der Gesamtschau der fruechristlichen und fruebyzantinischen Kunst", *BZ*, 63, 1970, p.50f.
- 3) William Tronzo, *The Via Latina Catacomb: Imitation and Discontinuity in Fourth-Century Roman Painting*, 1986.
- 4) Idoia Camiruaga, Miguel Angel de la Iglesia, Elena Sainz, *La Arquitectura del hipogeo de Via Latina*, 1994.
- 5) 6角形プランのクビクルムには次のようなものがある：
Ipogeo di Vibia 北側の崩落した墓室 / ネストリナンバーなし
Callisto 2 箇所、ほぼ西端、49、50、51の近く / ネストリナンバーなし
Marco e Marcelliano 4 箇所 / ネストリナンバーなし
Domitilla 39: WP126/crypta dei santi; 40: WP127, 2 / 清水の奇跡; 48: motivo decorativo in rosso; 68: graticcio; 69: graticcio, 死者の審判 (WP196); 74 : 変形 cubicolo dei fornai (WP193 他)
- 6) cf. *Die Religion in Geschichte und Gegenwart: Handwoerterbuch fuer Theologie u.Religionswiss.* Bd. 6, 1986. *ERE IX*, 406ff. RGG2V, 2063ff. F.C.Endres, *Mystik u.Magie der Zahlen*, 1935, 1951(2) P.Friesenhahn, *Hellenist. Wortzahlenmystik in NT*, 1935. V.F.HOPPER, *Medieval Number Symbolism*, New York, 1938. E.T.BELL, *The Magic of Numbers*, London, 1946. M.C.Ghyka, *Philosophie et mystique du nombre*, Paris, 1952. L.Paneth, *Zahls im Unbewusstsein*, 1952. RAERG 872ff. G, Germain, *Homere et la mystique des nombres*, Paris, 1954. U.Grossmann, *Studien zur Zahls des Frueh-MA* (ZKTh76, 1954, 19-54)
- 7) *de pallio* (偽テルトゥリアヌス、土岐正策訳 『パッリウムについて』、キリスト教教父著作集13、1987年)

pp.139-182.

- 8) アルフォンソ・M・ファウゾーネ「ヴィア・ラティナ・カタコンベのフレスコ画をめぐる論究―意見は十人十色: Quot homines, tot sententiae.....」、『南山神学』第8号、1985年、pp.111。(特に pp.70-77に「医学の授業」に関する研究史が簡潔にまとめられている)この論文は、この墓室I壁画に関しては、邦語で発表された最初の重要な論文である。
- 9) *Rendiconti PARA*, 30-31 (1957-58, 1959-60), p.116.
- 10) J.Klauser, *Rec. Ferrua, Jahrbuch fuer Antike und Christentum*, 5, 1962, pp.177-184.
- 11) G.Corner, "Physician and Pupils in a Fourth Century Painting", *Proceedings of the American Philosophical Society*, 101, 1957, pp.245-248.
- 12) C.Proskauer, "The Significance to Medical History of the Newly Discovered Fourth Century Fresco," *Bulletin of the New York Academy of Medicine*, 34, 1958, pp.672-686.
- 13) これについては、デ＝プロインがすでに指摘している。後述参照。オステアの石棺など。cf. *Age of Spirituality*, 1979, pp.279-280.
- 14) J.Hempel, "Aeitschriftenschau", *Zeitschrift fuer die alttestamentliche Wissenschaft*, 68, 1956, p.272.
- 15) E.Josi, "Decouverte d'une serie de peintures dans l'ipogee de la voie Latine", *Comptes Rendus de l'Academie des Inscriptions et Belles Lettres*, 1956, p.275.
- 16) Henri Marrou, "Une catacombe pagano-chretienne recemment decouverte a Rome", *Bulletin de la Societe Nationale des Antiquaires de France*, 1956, pp.78-81.
- 17) E.R.Goodenough, "Catacomb Art", *Journal of Biblical Literature*, 81, 1962, p.129.
- 18) J.Fink, "Lazarus an der Via Latina", *Roemische Quartalschrift*, 64, 1969, pp.209-217.
- 19) Pierre Boyancé, "Aristote sur une peinture de la Via Latina", *Studi e Testi*, Vol.IV, 1964, pp.107-124.
- 20) Lucien De Bruyne, "Aristote ou Socrate ? A propos d'une peinture de la Via Latina", *Rendiconti Atti della Pontificia Accademia di Archeologia*, serie III, Vol.XLII (1969-70), pp.173-193.
- 21) Boyancé, p.110
- 22) *Ibid.*, p.111
- 23) *Ibid.*, p.112
- 24) *Ibid.*, p.113
- 25) Ferrua, p.70, "nessuno guarda in basso, ma tutti piuttosto verso l'alto come il maestro."
- 26) Boyancé, p.113.
- 27) De Bruyne, p.180
- 28) *Ibid.*, p.178
- 29) *Ibid.*, p.179.
- 30) *Ibid.*, p.177.
- 31) *Ibid.*, p.180.
- 32) De Bruyne, p.183.
- 33) De Bruyne, p.189.
- 34) G.M.A.Hanfmann, "Socrates and Christ", *Harvard Studies in Classical Philology*, IX, 1951, pp.205-233. Jean Ch.Balty, "Nouvelles mosaïques du IVe siècle sous la «Cathédrale de l'est»", *Fouilles d'Apamée de Syrie, Miscellanea 7*, 1972, pp.163-185.
- 35) Hanfmann, p.208-209.
- 36) このテーマに関する詳細な研究として、P.Testini, "Osservazioni sull'iconografia del Cristo in trono fra gli Apostoli. A proposito di un distrutto oratorio cristiano presso l'agere Serviano a Roma", *Rivista dell'Istituto Nazionale d'Archeologia e Storia dell'Arte*, NSXI-XII, 1963, pp.231-300. があげられる。
- 37) Hanfmann, p.212.
- 38) *Ibid.*, P.228, n.43.

- 39) Ibid., p.213.
- 40) Ibid., p.213.
- 41) Ibid., p.214.
- 42) Ibid., p.214.
- 43) Konrad Gaiser, *Das Philosophenmozaik in Neapel eine Darstellung der platonischen Akademie*, 1979, pp.17-18.
- 44) Paul Zanker, *The Mask of Socrates The Image of the Intellectual in Antiquity*, 1995, pp.309.
- 45) 『キリスト教教父著作集 1 ユスティノス』柴田訳、教文館、1992年、p.20-21.
- 46) Ibid., p.152.
- 47) Ibid., p.62-62.
- 48) 『ケルソス駁論』1, 3, VII, 58.
- 49) De Bruyne, p.192.
- 50) Gaiser, pp.18-21.
- 51) cf. 「紀元後2-5世紀における、いわゆる中期・新プラトン主義の展開に際し、プラトニズム内部において、プラトンのテキスト解釈をめぐるさまざまな論争が惹起され、またそれにともなってプラトンの教説そのものがさまざまな変容をうけることになるが、その一つに『パイドン』のこの問題がある。」(野町啓「初期キリスト教とギリシア哲学」1972年、p.231.)
- 52) レオー世『キリストの神秘』2の2の4.
- 53) cf. 「出エジプトの原則」については、秋山学「バシレイオスと『ルネッサンス』—神学と人文主義の関係をめぐって—」『地中海学研究』XXII, 1999, pp.65-86.
- 54) 野町啓、p.214.
- 55) Zanker, *The Mask*, pp.307f. さらに、Abraham J.Malherbe, "Pseudo Heraclitus, Epistle 4 The Divinisation of the Wise Man", *Jahrbuch fuer Antike und Christentum*, 21, 1978, pp.42-64. において、犬儒派における民衆宗教の否定、オデュッセウスやヘラクレスをモデルとする賢人の神格化が言及される。
- 56) W. イエーガー、野町訳、『初期キリスト教とバイディア』、1964年、pp.80-81.
- 57) Ibid., pp.111-112.
- 58) Jas Elsner, *Art and the Roman Viewer*, 1995, p.275.
- 59) R. Milburn, *Early Christian Art and Architecture*, 1988, p.83.
- 60) Jonathan Z.Smith, *Drudgery Divine. On the Comparison of Early Christianities and the Religions of Late Antiquity*, 1990.
- 61) G.Fowden, Review Article, "Robin Lane Fox, Pagans and Christians," 1986. *The Journal of Roman Studies*, vol.LXXVIII, 1988, pp.173-182.